



西木周辺の

昔ばなし



かじか瀬

2015年11月22日(日)



西木周辺の昔ばなし

ヨテコ沢伝説

村の庄屋に娘三人がいた。院内岳には性根の悪い猿の一家が住んでいた。村を荒らし回っていた猿一家の息子が庄屋の娘を一人嫁に欲しいという。末娘のヨテコが猿の嫁になる。里帰りに餅を搗き、猿が石臼に入れたままの餅を背負って来ると、きれいな桜の花が咲いていた。ヨテコは一枝土産にしたいと猿に願う。猿は石臼を背負ったまま桜の木に登るが、ヨテコは上の枝を所望する。細い枝を折ろうとした猿は石臼を背負ったまま落ちて死ぬ。ヨテコは実家には帰らず、田沢湖畔の河童淵に身を沈めて命を絶ったという。

カンシキは案付

山の神は女神で冬山を歩き回るとき積雪にぬかって苦労なさることが多かった。神は考えた末木を曲げて足につけることを案付いた。このことから、昔は「カンシキ」とよんでいたという。(田沢湖町生保内) 一説には、八幡太郎義家公が安倍貞任を討つため、八幡平を越え仙北の地に攻め入ろうとした時、貞任は魔術を使って大雪をふらせたので、義家の軍勢は進退きわまり、杉の枝で輪を作ってはくことに案付いた。考えた場所は、今の鳩の湯の付近であるという。(西木村檜木内)

銭神沢の大蛇の化石

角館町中川の銭神沢に、銭形の斑文のある大蛇が住んでいた。ある時領主が狩に出て、偶然出会った大蛇を射たが、急所をはずれたため、大蛇は人間に姿を変えて、西木村西明寺の門屋方面に逃げ、さらに田沢にぬけて湯治をした。ほぼ癒えて帰途についたが、大石嶽の麓に来た時、遂に殺され、その遺骸は化石となった。今でも化石の割れ目に銭形のある小蛇が住んでいるそうだ。

五斗坂と五斗淵

西木村小白川の袖野（ストーンサークルのある地）の付近に長者倉というところがある。昔この地にある長者が住んでおり、辰子は長者の家に女中奉公していたが、九曲もある坂を小豆五斗背負って下り、院内川の淵まで小豆ときに行くのが毎日の仕事であったという。辰子は働き手で、どんな仕事もやりとおしたという。辰子が登り下りした坂の名を五斗坂といい、淵を五斗淵という。

寝仏

鳩峯神社に行く途中の国有林のなかに、長さ七〇ハメートルばかりの、人間が寝ている姿に似た大石があり、村の人は寝仏様とよんでいる。早起き、寝小便なおしに靈験があり、また頭痛平癒には枕をあ

げて祈願するとよいなどの信仰がある。

船越村のむじな

角館山中にも湖水がある。ここに八郎の雌竜が住んでいると言われている。院内に六人の衆徒という者がいて、その中の神成沢の常殿坊の娘で鶴子というのが、嫉妬が深くて蛇身となりこの湖水に來た。この水は船越へ水脈が通じていて、年に一度は二匹の竜が出会うという。

仙岩峠の山賊

仙岩峠には女の山賊がおり、川を負ぶって渡してくれと誘い、有り金全部奪う。ある男が山賊退治に出かけ、この女山賊を退治する。向こう岸にある家には母親と妹がいたが、姉の亡骸を届けられ、それから改心した。

長者の山

玉川地域で金山の開発を手掛けたのは、陸奥の豪族安倍頼良であったという。金山探索の一行は、南部領の葛根田（かっこんだ）から山を越え、出羽領の「八尺の沢」で金山を発見したという。二年後のあ

る夜、二人組みの盗賊に襲われてリーダーの石黒直久が殺されたので、高台に「長者館」が建てられたという。その後、「川崎の六〇目の沢」(金が日産六十匁出た)、「ダラメ沢」(粒状のダラメ金)、石黒氏にちなんだ「石黒森」「石黒沢」などが地名として残り、当時の坑道跡らしいものも残っているという。

河童の話

小勝川集落の甚助の家で放馬をしていたら、河童が馬を淵に引き込もうとして、反対に既に引きずり込まれた。馬槽に隠れていたが見つかり、摺臼を引かされこき使われ、殺されそうになった。助命を願い、聞き入れられると、礼に一本の匙を置いていった。この匙で調合した薬が売れて、大金持ちになったが、いつしか匙が見えなくなると、家は傾いていった。

弁慶の凹石

古城山の旧大手口の登口に、二個の石がある。その石面に足跡状の風化した凹みがそれぞれついているが、これは弁慶の足跡だという。

イタコ塚

昔、大野堰の人柱となった、イタコのお小夜の霊を慰めるため埋葬して、小白川の上田に塚を造ったという

飛んだ舟

昔ある男がカルケヤ崎で、大櫓を使って舟をえぐった。完成が間近になった時、ひとりで舟が走り出し、センノ木沢を通り、村人があれよあれよという間に湖中に落ち、湖底深くつきささってしまったという。光年になっても湖底に舟型が見えていたという。

大威徳山

弁慶が大威徳山をみて、この山を背負って自分の力の程を試してみたいと思った。そこで、この山に縄をかけて、背負おうとしたができなかった。その際、満身の力を入れて苦しさに涙を流した。その涙が山のすそを流れて川となった。この川を“なみだ川”といっているが、玉川の上流の辺である。また、この峰のニヶ所にくぼんだところがあるが、それは、その時縄をかけたあとで、また笠をぬいだところが、アシカサ森とよばれた。

最明寺時頼（さいみょうじゆきよりの）

鎌倉幕府の執権北条時頼は、家督をゆずって最明寺で出家し、諸国巡業の旅に出て、津軽でかつての愛妾唐系の舞姫の死にめぐりあったという大館に入った時に唐系の死後ひと七日たっていたので、一七山釈迦堂を建て追善供養をした。ふた七日めに秋田に着き、仏像を安置して唐系の菩提を弔ったのが二七光明寺である。仙北西木村の西明寺には三七山光明寺があり、この地名はみ七日めに着いた最明寺時頼に因んだものである。この後、象潟蚶満寺にも立ち寄り、寺領を与えたといわれている。

カチカチ山

雲沢の太平山にウサギとクマがいた。あるときクマがやけどをしたので、ウサギが松ヤニを塗ればよいと教えた。ウサギはその後松木内川において、渡し守をだまし、焼いた小魚を食べた。そこへ怒ったクマが来ると、ウサギはもっと良い薬がある。川にいる魚を食べれば良いと教えた。泳げないクマはおぼれて死んだ。そこでウサギはある家にクマを運び、クマ汁にして食べた。そこは渡し守の家で、あやうく捕まえられかけたが、命からがら逃げ出した。

カラガラス

角館町下延につたわる話では、カラガラス（ヨシキリ）は常光寺に奉公していたが、その住職が口うるさい人だった。ある日、カラガラスは住職の草履を片方なくしてしまい、寺を追い出される。そのためにカラガラスは「常光寺常光寺ケエケヤシ（こやかましい者）ケエケヤシ」と鳴く。

大蔵山観世

本尊は坂上田村麻呂東征の際に兜の八幡座にこめたものと言われる。この祠堂の後方、老杉の下に穴があり、田沢湖に通じているという。

薬師様

白岩村広久内の佐藤久左衛門の祖先は、有名なマタギだった。永正二年二月、村の東にそびえる奥羽山脈の白岩嶽へ狩りに行った。近くの山の頂上で一服したときのことだ。傍らの雪の中から蒼い小蛇が姿を現し、クルクル三度廻って雪の中へ潜って行った。不思議に思い雪を掘ってみたら、薬師の小像が燦然と光を放っていた。以来そこに薬師を祀り、山の名も薬師嶽と言われるようになった。佐藤家に、今もそのご本尊が伝えられている。

勇然坊

勇然坊は高筑紫森から小山田の山に琵琶を持って飛行しようとした。勇然淵の岩瀬に落ち、その時の足跡や手のあとが岩上にあり、琵琶は淵に落ち右に化した。

メンゴ淵の河童（めんごづちのかっぱ）

沢の村近くの淵を村人はメンゴ淵と呼んでいるが、この名はメンゴ（可愛い子供）が河童に捕えられこゝからきている。田中与治右エ門の馬を河童が淵へ引き入れようとしたが、逆に馬にひかれて厩へ来た。馬桶をかぶってかくれたが、発見され叩き殺されそうになり、人を害さないとあやまり解放してもらった。以来河童は人に悪戯しない。子供達が泳ぎに行くとき河童の頭上の皿をわる力があるというオガラフを持っていくと、河童は恐れて近寄らない。

鮭と夜叉明王（さけとやしゃみやうじおひ）

昔は玉川の上流まで鮭がのぼり、角館の大威徳神社下でも毎年鮭網をおろして漁をした。ある年背の高い坊主が毎日のように来るので、漁師たちが鮭をよろうかと声をかけ、断る坊主に無理にキノメの蔓（アケビの蔓）でゆわえ、鮭を背負わせた。坊主は立ち去り、それ以来玉川に鮭がのぼらなくなった。その坊主は、大威徳夜叉明王であり、今で

も腹痛平癒祈願する者は、鮭とアケビを断つという。

鮭女房

昔、男が大威徳神社に祈願し、満願の日白衣の爺に石段で待てばかなえられると言われた。若く美しい女に赤児を抱いていくれと頼まれ、重くなるのに耐えていると女は力強い男になったと言い、夫の名乗りをした。夫婦仲が良く、嫁は料理が上手で、若者が水屋をのそくと、女は鍋をまたいで小便をしていた。見られたと気づき、女は水屋尻に飛び込み、大鮭になって大威徳山の縁の方に泳いでいってしまった。

堂の沢の片目鰻

西明寺八津観音本宮の南端の堂の沢に棲息する鰻はどれも片目だという。昔、沢の奥に金山があったが、ある日坑道が崩れ、多くの鉱夫が圧死し、その血が堂の沢の溪流に入ったため、鰻は全部片目になってしまった。

大野堰の人柱

元和5年（1619）大野堰の水かかりの百姓が神様に祈願した。前年大洪水にあい、大野堰のとめが破れ、西明寺付近が被害を被ったため、竜神の祟りをはらうには牝牛に巫女をのせ、生贄に捧げよという御託宣だった。小白川集落のお小夜という美女が飢饉の時南部から親子で流れてきて、女中として仕え、巫女だったので、村人の嘆願に承諾し、水中深く生き埋めにされた。村人は堰堤を築き、大日如来の一字を建て、お小夜の霊に報いるため七つの禁断を誓った。その禁断の一つでも破るとその家七代にわたり、七不思議の祟りがあるという。

穴堰の人柱

下河原芳谷地の道心坊の清水をひいて、菅沢開拓田の灌漑用水としようと、水路を作っていたが、金山付近に水路を通すところがなく、金山下に隧道を通すことになった。岩が固く掘鑿が困難だったので、稚児を牛にのせて人柱としたという。稚児の名は四郎とか、そのため付近の坂を四郎坂という。

飛んだ温泉

昔雲沢の坊沢に有名な温泉があったが、村の八幡社の祭酒に酔った鋤夫たちが温泉へ馬の骨を投じた

ところ、温泉が怒って抱き帰りの奥にとんでいってしまった。神代の抱返り溪谷にある夏瀬温泉がそれであるという。また、田沢湖町乳頭温泉郷のつるの湯は、昔病んだつるがおりて、この湯で病気をなおして飛び去ったために、この名がついたという。

祖父が沼

角館町雲然の地に祖父が沼といって深い沼があった。沼には大蛇が棲んでおり、時々美男に化けて付近を歩き回った。山伏の妻を知った大蛇は夜な夜な通い、気づいた姑女が嫁に注意したところ、嫁は否定したが、美男と密かにあっていた。そのうち妊娠し、月みちて分娩したところ七、八寸の蛇が十匹ばかり出たという。

アメ鱒落とし

昔、ある山に住んでいた鷺が、湖岸（田沢湖）の岩頭から、湖中を泳ぎ回るアメ鱒をねらっていた。アメ鱒の一群が岸によって泳ぎ回っていると、鷺は一撃しよと急降下し、一匹のアメ鱒をつかみ上空にのがれようとした。アメ鱒も水底深く沈んで爪を逃れようとし、格闘を続けたが、ついには両者力尽きて死んでしまった。この格闘のあった付近を「アメ鱒落とし」といっている。

ガラクラ

檜木内戸沢館の東南方に突出している山端に、円錐形の小山があり、北斜面を石森またはガラクラと呼んでいる。一説によれば、蝦夷が館を目がけて石を投じたところといわれ、大小の石が散乱している。館と石森の距離は一町ほどで、蝦夷といえども館まで投ずることはできそうもない。ある人の話によれば、この地より約半里程の奥の「奥石森」という山にも、石が散在している。昔、戸沢館を守護していた大蛇が棲息していたといわれ、近年蕨取りに行った女達が耳のある蛇をみたといひ、大蛇の化身であろうといって逃げ帰ったという。

大仏嶽の拝み石

西木村檜木内と北秋田阿仁合町の境界に、大仏嶽があり、檜木内川の支流、浦子内沢、小波内沢等がその源を発している。大仏嶽に拝み石といわれる石があり、ある時又鬼（漁師）が、アオシシを発見して追って行くと、拝み石の辺で消えた。付近を見ると、雪に大穴があいていて、その底はどこまで深いかわからなかった。又鬼は冷や汗が湧き、逃げ帰ったという。その穴は鬼の穴だったろうといひ、その付近に行くことは禁じられている。

巫女石と山伏石（みづつとやまぶつとつ）

神代発電所を過ぎ、抱返神社の東に流れる玉川の河中に二個の奇岩が立っている。大同の昔、山伏が巫女を連れ、白岩嶽の薬師に参詣にきた。河中に入ると大津波が起こり、山伏は巫女を抱き上げ難を逃れ、巫女を岸に残して泳いで向こう岸についた。巫女も河中に身を入れたが、水勢に流された時、神霊が現れ巫女を救った。巫女は崇敬のあまり、大岩と化した。山伏が巫女の名を呼ぶと岩が答え、この一件を語った。山伏は、明神様を礼拝しなかったのは残念と自分も大石に化してしまった。玉川の二石は、今も神の御力の不思議さを物語っている。

駒ヶ岳

田沢湖町生保内の東に聳える駒ヶ岳は、二重式火山としてまた高山植物の豊富な山として有名である。特に高山植物のコマクサ・ムシトリスミシの群落は我が国北部の代表で、大正十五年二月二十四に天然記念物に指定されている。春の雪消えの頃、盛岡の方から見ると駒ヶ岳に馬の前身のような形が黒く見えるという。昔、東の国の領主が、秋田から馬を買ってくる途中、生保内の山越えで馬が一頭いなくないたと思うと倒れて死んでしまった。その後春になると、駒の姿が見えるようになったという。南部領に不作が多く秋田藩が豊富なのは、駒の姿が南部領に頭を、秋田藩の方に尻を向けているからだという。

駒ヶ岳

駒ヶ岳は、その名の通りに南部領からみても、秋田領から見ても駒の形に見えるといわれ、崇拜されている。昔、南部から秋田へ駒を買いに来て、馬を買って帰る時、国見峠に来たら馬が動かなくなつて、遂に駒ヶ岳になってしまった。曳いて帰るので自然馬の尻は秋田側にあり、南部側にある頭が南部の草を食つて糞を秋田側にするため、秋田側は地味が肥えよい米ができるが、南部は稗や粟でようやく飢えをしのぐのだという。

国見峠と仏沢

板沢から田沢に越える道の峠に立つと、平鹿や雄勝の方まで見えるため、国見峠という。仏沢は小杉山から心像にぬける途中にある集落で、この名は虚空蔵菩薩を祀った「仏ヶ峯」があるため、峯の沢という意味で出たという。小杉山と杉沢の間に柳沢集落があり、雷公者というお宮がある。昔落雷のあつた地に、五大力菩薩一柱「雷電吼」を祀つたという。金剛吼、竜王吼、無畏十力吼、雷電吼、無量力吼の五柱の仏様で、金剛吼は手に千宝相輪を持ち、竜王吼は金輪灯を、無畏十力吼は金剛杵を、雷電吼は千宝羅網を無量力吼は手に五千剣輪を持って、守護国家の任にあつている。家の四隅に「五大力菩薩」と書いて貼っておくと、盗難除けの御利益があるという。小杉山集落の手前に鳥居野という所があり、昔十一面観音の鳥居がこの野にたつていたことから来たという。

小玉ネズミの話

ミズ木の肌が赤いのは、次のような訳がある。山の神が、七人組の小屋へ泊まったときにお産をした。そのときミズ木の枝を敷いたので、血がついて赤くなったのだという。血で染まった木なので、マタギがミズ木を使うことはないし、人によっては家を建てる材木としても使わないという。

マタギの話

山に入る人のいる家では、寒の三十日間、絶対に豆を煎ってはならない。豆のはじける響きで、雪が裂け雪崩が起きるからである。以前、村から山形県へ四、五人で猟に出かけたことがあった。その内の一人の家で豆を煎ろうとしたので、皆は過ちがあつてはならないから止めるように忠告した。それでも構わず煎ったところ、一行は大雪崩に遭遇した。しかも他の者は助かり、豆を煎った家のマタギだけ圧死したので村人は身震いした。

重五郎とムジナ

或るとき、重五郎が畏に掛かったムジナを捕ってきた。腹を裂かずに、いわゆるエンドえぐりにしてマ

メ(掌)までもはいだ。ところが、はぎ終わるやいなや、その赤メロの貉がムックリ起き上がり、スタスタと歩き出した。それは、重五郎が出産の忌み期間であるにもかかわらず獺に行ったせいだと言われている。

ムジナの屋根滑り

明治になってからの話だ。東右卫門は大きな家で、大黒柱は抱き抱えられないほど太く使用人も五人ほどいた。鉢山成金で、村の税金の半分を納めていた。ある夜から、家がミンミンと不気味な動きをするようになった。ノリギ(法力者)に被ってもらったが止まなかった。一匹の大ムジナが、屋根雪に幾筋もの跡を残して滑り降りていたからだ。火縄銃で仕留めてから、その怪事は起きなくなったそうだ。

石の怪

大仏に、拝み石という所がある。雪に大穴が開いていて、人がシシを追ってそこまで行くと追っていたシシが急に見えなくなる。鬼がいるといわれ、行く所ではないとされている。小滝の専右卫門も、そこで鬼にやられたと言われている。

小玉しちゅ

昔、小玉しちゅ(連中)と杉野しちゅの二組の又鬼(マタギ)が小屋掛けした。カクラさん(山神)がお産の宿を借りに行くが、小玉しちゅは貸さず、杉野しちゅは貸してミツ木を敷いて床を作った。カクラさんはそこで十二人の子どもを産み、子どもたちは何処かへ飛んでいった。ミツ木はお産の血で染まり赤くなった。小玉しちゅは鼠にされ、それを恨んで軀体を弾けさせ鉄砲よりもひどい音をさせて祟っている。